草庵集蒙求談解六

冬

草庵和歌集蒙求藤解巻第八

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

冬哥

清子左大納言家三首　初冬

いづくゝあら秋を杉くりてふ風ふきをさいたゞきをはらしきわたん
時雨杉みな秋をばいづくにかぬけさいたゞきや時雨を
はらしあるらんと冬のくるゝ杉のこずえのこゝろやく
しけるかをのづから

小野社三首小　時雨

むらさめはすゝしいそどふ風の吹とゝもに人ふゆくさくれうる
村雨の立をうゝてぬれぬうぬぬぬるかと鶯の鳴ぬ間ぬぐやこ
風の吹ぬまさらんまりぬ時雨ぬ降ぬ時ぬ

ゞハ也。志賀也

二條大納言家三首　初冬　時雨

みそらゆくたなびかぬかぜの神無月　里まくまさしきこれ河面かな

例　おもへども里まくまの名ぶ河面をいとろよいれ村をし　寂蓮　河面い

ごとも一同よいうぐぶ里とまけてぶる里も有ぶうぬ里も有る

ほどうまれたれたれぐ冬のあり来とはぐる方の有てぶ里

ハぬりぶ人はげぬ里まは降ぬうぬ也

河面

晴くれる冬里こそうまを神無月　えい河面れ上ぬ有もう

晴くうぶくりうぶるうて里ぶうぬ里ぶうぬ里の有てそこて

あれ一天の内何のかりても河面のぶうぬ白いなぐぶこぞ乃えい

ふるなり

茅持院殿右大臣家三首

いたくまて山ぶぐりして村をれ入りきくれ上河面ぶ有ん

河面ぶ山ぶぐもする和ぶれば山ぶくもぶぐりて少い程も有

べきと思てぶいぶくまぐぐりてそ。なぐうぬ冬ぶ早ぶうぬぶ

て河面ぶ有ぶうぬ也ぶぐ河面る体也

右歌作　和義門ト云ぶく易ぶく奇ぶまれぬ

時雨

紫の戸ぶ入ぶてぶ村河面風ぶぐぶるたぐりぶ有ぶう

紫の戸ぶ入ぶも有ぶてぶ山ぶぐぶぐぶ有ぶぐ

とぬぐぶするぶいそぶ有ぶも。ぶい有れと。河面ぶそへ。ぶいぶうの

山をのぐぶう

茅持院殿右大臣家五首　時雨

松ぶのぶぶぶれぶぶて風ぶのぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ

雨風ハ河面ぶ似ぶる和ぶれ。風ぶ河面の吹ぶぶぶ雨ぶ。

おくり強くふる山風の音が時雨をのこしける様なると也

大臈大夫頼康家にて　荻時雨

時雨さへ山かこねざめとなりにけりあはれ世をそむく[illegible]覚よ

補寂月にかみふかずも定なき時雨ぞ冬のはじめなりける　続千載初冬

[illegible]覚にも世のあはれなる事を観念してきけばわしも時雨さへ涙

よりふりかゝりてふりあたりゆくはゆく無常と観ずる也

重護法二品親王家五首にて　朝時雨

いつる日の影をたゝぬ村雲をふくやうにもぬくうる志ぐれまじりか

村雲あれば落くして朝日の影にはなるとみれば程なく晴て

過ぎてゆく空のくもるほどにして時雨のふる様也。たまらぬはとま

らぬと同意也。ぞんでふられぬ也　積　例　衣はにかくもあらねど

月影をとまらぬ秋の露ところで見れ　秋中　いかなる[illegible]

陸の風さえてそそまりもあへぞふるあられ積るか　如清三宝院入道前内大臣　冬

清子た大納言家十首にて　夕時雨

かきくらしねかひとみまされば山のくれ時雨ともけさく夕日さしにけり

村時雨のそらゆくるゆく雲まより夕日のひかりくる様を時雨と

いふり。東邊日出西邊雨　刘禹錫　詩格上

風前時雨

山風は吹ともけりさそはれてよそなればあらしもなれたる

時雨は風のさそふ間ぞりふりて。風よはれども空もあるゆく

志ぐれのなるゝ也。程は間のある也。山風の吹間斗也。程をふる

なるの様也。春雪。夜帰ありあ

玉津嶋まで待し時志のぐれかゝりて時雨れし

待しうれ

玉津嶋。紀州和歌浦にあり衣通姫の社なり。信太杜は

和泉也

一よまでハ梢こそそめぬるまでもしぐれもたえぬ木の葉のちえなれなづくに
和泉なる信田の杜の楠の千枝よりわかれてものこそおもへ　六帖
今よめるハこゝにて千枝にわかるゝ所にもあらで、ふかくそめたるを
思ひやりてしのびて時雨のしぐれそめける心なるべしに。
いかれなるぞやとはれつゝもかひなき時雨のしたそめなりと
うらめしげなる葉を　楠の梢のちえにわかれてしぐれにそめやすくなるを
て。杜の梢へよれバ千枝の末までしぐれゆく時雨よりハ袖乃
ぬるゝ也

　　等持院贈左大臣家にて　　時雨

ふきまよふ嵐にしぐれハやがてみだれふりとまるべくもなし
嵐の時雨をさそひきてそのくもりとどまれバやがて晴間もなく
みだれにたちまぎれて時雨のふるなれ也
　　刑部卿範廣朝臣家にて会合の後しぐれて　　時雨

ひまなくしぐれをいづくよりふりくるあらしなるらん
時雨のふりけるハ時雨をふらすなき嵐ハいづくよりぞ又嵐のさそひ
来るらんと也

　　民部卿家にて　　おなじ心を

神無月嵐のすゑの村雲をさそひまよふ時雨にそめる
嵐のさそひゆく末の村雲にそ時雨のたちまち里にふり降るらんと
なり也

　　金蓮寺にて　　暁時雨

うき袖もしのびもいでぬ有明の月にさそふしぐれもれそゝぐ
在明のつれなく見えし別よりあかつきばかりうきものはなし　古今三
なれぬる在明の月に。折しも村雲のかゝりて面白き所あり
えみに詠なしたるかくしてさのみかくさぬ時雨なり
まして時雨は別路にかゝりてもうき事ハありと。

仏家と分て忠岑は所まだも思あるべきものとは存ぜず。
一具に面白くぞ所存ゆゑ。ただ物也とて、まことも忠いいだべる也。
いでぬいでぬる也。二句ともそどのとれいぬる所存ゆゑ物也。
ら。又面白方もあれど一句ふうきてだべるもいとそだべうへ
賞翫とる方もあり也

屋上所存

冬のとれ移やの板といゆやでいく変とわくぬるもたれる
所ますすぐる和思ひ法は明やるぬ移やれいまさんはれまるるる 後拾遺
けるごも長さ冬の葉とて移やの板まの明やるを行るゆるい
所存れ変こるゆゑいとぐ板まの明やるぬやれ忘られて所存の
うさ也

海辺時雨

こゝわくむあとれ板屋のひ所存もとも忠しめるてなるとい

垣をとむゆゑ下地が枝のわれてあれどやゝい板屋より所存の
もりて神よりふるとてもいと所存ゆゑよりめるとは忠る也

住吉百首奇合よ　落葉

神無月とれ木の葉を所存ふとる忠れのこ海りまし
木の葉乃忠ゞ所存の中ゆるれいとて所存ゆゝ忠もたれ
ゆゝ也。結句一本ゝてゆまるゝ忠いはど

獨吟百首

冬をけこそふるとみゝ忠ゆゝ忠れ忠いたれよいつゆゝいん
所存ハ乃紫の色をとそむるゝ忠ばりるに乃忠ふのちる忠いゝ
時雨よりゝいて所存ん。さゆゝ所存のゆゝなるゝ也。所存と
きけば木のくれふる和をとそれしもめるて乃ば枝るる 資隆卿百首 詩格
十七条陳葦茫。黄葉詩。夢回壁々雨聲中。窓影分明
曉色紅出戸方知是黄葉更無一片在梧桐引合ゝる

べし此哥によく似たる詩也

贈左大臣家にて　落葉

木からしのはらふ木の葉をいづくとも猶のこしけしむらさめぞふく

木末にのこさぬのこらひづくにもおさとぞ木陰につもるなる

木の葉をも。山風が吹ちらす也。猶いふまでもなし

金蓮寺十首哥合に

落葉ハかくもとてしも山そせれはたゞ木の葉のみ波にやみえん

ちりまがふハかれどもくもらぬ玉の秋の黒髪をなぞらへずや有らん

遍昭(拾新三)此本哥ハ。遍昭の落髪の時の哥也。かくれどもくもらはいく

あれとそ也。又本哥ハ。神にかゝるゆく縁の詞にも減也。しかとは

助字なり。がらを。こなたでは也。月。木の葉の花に出たり。本哥ハ

は木の葉と。ちよく波て。波ともみるべきところと思へん。おちに

まなやかく。山風に吹ちらし紅葉をなせとては。波ぞ見つらん

物をげらなく惜き事なる也　神なるれ思ふのなりの紅葉をかと

おもしふけとはそあとやゆりきたん　七条院大納言　新古今　此よりまさられ

弾正親王家五十首に

吹わとハ流るゝも庭にて夕風のよそれハ庭そ木の葉ぞかゝる

風の吹る時ハ。空に散乱れて。風のよわれハ庭に落る也。陳簡

斎詩集五。柳絮。柳送腰支日幾回。更教飛絮舞楼

臺。顛狂忽作高千丈。風力微時穏下来。此詩に似たり

路落葉

いられハ木枯のまきにむ道をとみてねまそ紅葉散しくみち風

紅葉の陰ハ云に及ばず。そのときハ木の陰までも。風の吹き

そひて道の見えぬまでに吹しく也。吹しくハ吹頻るといふ事も

あれども。此哥ハ吹まく也。続川。続の意。道に出たり。陰なむ

なハ木の陰をとふらふなり也　枯の陰にむなのやちまふた地をぞ

ちるもいきあはうあいだて　所なもいきあはうあいだて　古春上

ゆく道をよ人のやすらへ　落葉

源之政のうたをうつしみ侍りし時

部類云。源。光正。今岑駿河。字。彈正。少弼頼遠。男。新千歳。新拾遺。新後拾遺。新後古今。作者。此仁平。光政といはれし。是ハ後拾遺も出たり

霧霜はれ波しるかれ人波しるかれ　みちをたれ　みちをたれ

枝もて秀れ人波しるかれ入の深さ色のかはりぬるそのさまを

よこたへつるもの。又深さ也枝もて木の葉紅葉なれ　ふく

又色をかはりて。紅葉もはりてまりそもて深さ也是い色

つまりのふるれ也又色ハ古ハ色ハ

落葉　混雨

神無月そめ〜木ハいのふりそいて時雨も多ふりふるかな

時雨が色ふるくそめるまのくれぬはいの色をしらつゆふるゆく

ちぐれもをのの音やたんゆる紙色にいづるしぐれ風ふるる紅葉

乃色ハ神無月の紅乃時雨ふるそ　千載集　是ハ乃出ふる紅

陸子在大納言家三首　落葉

ちりてをみしれはうもをれ面ふるそ木ハ紅葉の沼ゆりくる

時雨ハ色ハ　ちりぬれども色くそれ　古秋下　紅葉ハ古ハ色ハ

とりてゆく　行ゆく　深ぬ　深ぬれ　しぐれ　紅葉の至極なる

木のくれ色乃ふりうりて深く深ふるを至極深く秋いろしぐ

をれふりも今色をふるる時　木ハくれ乃沼ふりなる也

秋の井沼ふの木ハくれの時雨ふそ井をれふるを多ふりきく

ふいの時雨ふ多のかりそふ色ふそ木ハくれ乃時雨ふりて井也

さふふりれば水も色のかくる也ふりれば水も時雨深きまて

色のかはるといふ縁也。拾遺云、公任。落たぎる紅葉
をみれば大井川井せきに秋もとゞまる也なりけり

民部卿家三首

冬ハ又さゝひし水をせかれとめて木の葉そへつもる冬には山川ハ
始ハわづか木の葉にひきてせきいれたるにせかれともえしが
冬ハ又木の葉がはらりて水をせかれとゝむる也

後鳥羽院五十首　川落葉

紅葉ちる雨とふるにもまさりきやせかれてよどむ山川のみの
をせとまりてそ渡らん紅葉ハ雨とふるとものハ渡さらじ
紅葉の所ゆへ水ハ渡さらじと也。紅葉も木のそれにせかれて水のよど
むそうれハ紅葉その雨にもなをのまさる也

落葉

山たかみ風にちりくる紅葉とともにゆくかやまさりをたらん

山より風にさそはれてちりくる紅葉どちの下を行水又さ
そはれてちりげにそとゝめてや惜むなるらん

清水浄弁のもとにて　落葉霜

もみぢ葉ハ縁く霜れしそぶつする井ちら木葉に風やはらん
木のまに霜の置ける落葉を、よく風ち吹くへとゆくへ霜が
枯くまかえゆる也。縁くいむらくれ縁也。なくてける葉は霜が見
えどもそれ木葉ハ霜乃見ゆるゆくへなくしてそ一面に同じゆう
りたる也

民部卿百首に

霜かく落葉かく人もる庭にたりあるは庵の物とみゆるまで
落葉をふみわくる跡をそれハ庵のむしろとせず。落葉に霜深
く跡ゆくへふみたる跡のこゆる也。まづとそ霜の深さ径を
いへり。霜が落くてはは跡乃見くなる也

茅屋白敷くもちうちうと行く時　左義長

左義長とは小正月の夜に行ふ事なり。その時の事を吹流しなどいふなり。

勧学院障子の内侍と川の冬ごもりする所

冬ごもりする所のことばをもとめしめ給ひし御歌なり。

の木末ども。上葉いと下葉まで強く散らなるべし。

左義長川はすべて流れの声もむせぶばかりなり。咽い水の物ごとに

すべて走るなり。音をいづれば咽へなるが

昔とかはる歌なりけり　平兼盛集

咽下情　古今後集　北山殺文　滝水凍咽流不得　白氏

落葉

つもる日つもるとしるやつぐみ初る木の葉ちるらん

陽成院　たかこ

咽泉聲氷下難　古今歌集　志賀人行　石泉

ぬくるれの岩より落るみなの川底で結りて流てゆけふ

ふる木の葉ちてぞ有りけんとも。紅葉の淵ともいへり。木の葉の

はるりて淵のごとくなるなり。

茅村流紅葉　左大臣家三首　殘菊

ぢうりをぞ拾ひあつめる菊の花　秋のさかりを見れば霜のすがた

ぶ〜〜うへに枯をき河やさらぢん　花ぞちりぬる根さへ枯めや　行基法師下句如此

夕ぐれの秋のあれ河いをけまぶ　秋のあんぢりへ千ほ百ほも咲ぐ

しをいつぱ方へ冬ぐ〜めうを　枯をき河とろう　菊花霜

色のそ〜物をしぶ　秋をれ河の冬れ白も　秋のぐく盛よ白ぐ也

ぶ〜の秋のこども菊合太もまる　ぢのでよ延喜帝御歌　きぐ〜秋はく

枯行助人の花をれど　霜の色ぐ白ぐ多ぶ　新古冬　菊花霜

てはぶじ神霜のぐ多ぐ　色ぢさりぶれ　菊晩秋　古冬　荷蓋已

無鞍山雨蓋菊　殘猶有傲霜枝　東坡　四五株柳　經雨色。

兩三叢菊　飽霜花　白氏長慶集

民戸の家百首

夕ぐれ草

夕ぐれいうあり　秋の風の　ぢとうま　紫ふのぐ　ぶをれ　みれ　ぢう

秋の草　あたをぐ　ぢうて　音たて　風のぐ　まきて　萩のぐ　ぶい　孫ぐ

吹ぐ〜ぢうぐ〜夕風のぐ　ぶい草本皆枯ぐ　草のぢけぐ　ぢ　ぢ

ぢうぶい枯てぐ　な紙ぐ　ぢうぐ〜風の音を孫ぐ　夕ぐれい風の吹ぐ

ぶ物をれぐ也

冬歌ぢ

いまも枯秋ぐ　花れ面ぐ　ぶけ　ふたちぶ　ぐ〜ぢのぢをれ下ぐ

冬枯して　歌の花　ぶけ　ぐ　ぢ　ぢ　ぶ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ

も秋の花の面　紅葉　たつ也　立孫　武蔵也　面紅葉　ぢ　ぢ　ぢ

ぶ枯いまぐ也　鷺　鷺　冷霜花重　白氏長慶集

枯ぢぶ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ

ぢの枯ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ

枯ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ

ぢそぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ

ぢ枯ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ

まだ花の枯るるもとも思ひ結句二本又るまんとの事。神妙おいそそく
をもとも又くるにいたるのまふり素河山ゆくゆくゆくゆく茅茨の宿
てゆくもまんかう程よ思ひ

清ゆをえ細言家ゆく　野徑之草

素うもとこいまや茅茨荒れそそ家しんぬ沼いみくゆむさ野れいく
上白倒句ゆくそ初也ゆくや茅ごの素花の果ゆんとくとトトへとう
沼ゆにいくうる也。杜詩秋興八首中小紅稻啄餘鸚鵡粒碧梧棲荒鳳凰枝と有い鸚鵡啄餘紅稻粒鳳凰棲荒
碧梧枝と云へきを。倒よ素さる白花よ同し。武義郎人を
く廣きゆ人果乃ゆれゆうれゆよゆる也　武義郎人ゆけども秋の
果ぞなれいうなる風の吉よ沼ゆん（通具彩　名秋上）などゆ茅の吉ゆ
四い青色と名ようよ初乃末ゆるゆ小目踏ふゆくしゆ茅の花
くそくい色なれゆ人茅ぞいゆ人茅ゆ草ゆ素花く

て一沼ゆ、あゆんと也沼ゆとは武義郎の遠き果をゆう

金蓮寺十首奇合　宣草

朽のくるふ枯葉も素ふゆうもて名ゆきゆのをゆおさぐ人
冬乃河ふゆ白ゆ也。枯ゆうてまきき茅葉うもあば秋はの
名ゆ花へべゆしごと。濃茅乃朽葉乃朽葉ゆ藏ゆきゆ名ゆく
煙きゆれい名ゆ秋はゆうて。何の秋ゆうもなくゆ也。秋はゆ。
小野。大和也。紀別よ同名ゆう。神妙朝風乃沢よ知ゆ

杜宣草

茅ゆ白ゆふ木葉や素をいぐゆんかくぞをそゆうれ下ゆ
木乃葉ゆ下の茅ゆい素乃をゆゆゆくゆくゆ枯る也
人ゆ小白河ゆ素ふゆ十首奇遠ぞゆきゆ

雨夜宣草

小白川。土人乃云。黄仁白川。南禪寺の小ゆ。西へ流。云素

のかたに鴨川へ流合しなり此川を隔て北の地をば白川
と云南の地をば南白川と云しにや
されば我結ひにしよもぎまでいとゞさびしかるべき
蓬生茂りたる庵に訪ひくる人もなければ庵も
えしらずと人もたづぬればかるしきをもみえてさびしかり
しかば今はその蓬さへかれぬれば庵のありさへいよくさび
しきなりといふはいよく也又一説蓬の有し内はさながら結ぶ一見
えしが枯ては跡かたもなくゆくへもしらずさびしき也
花薄の作 和義秋に 家かく　野亭冬草
秋もふかやすゝきをみて冬がまれなるともかの萩のちりさき
冬になりて秋のつゞくことをそときさしいひて遠里小野へつゞけ
さるなり此歌の冬きまにおもかしくおのする萩がえの冬をとがめ
はこかりて霜の得也露結為霜の例なり遠里小野萩

住吉の南東の並也俗にきりをの小野といふ也
冬月
月こそ稀まれ葉くもりてぞおりまがふ秋のさゝにはさもおもしろよ
枠(のぞき)かふしき枝に一村おきまよひ秋の形をとゞめぬ遍昭
本歌は木の葉がこしおりて秋のこゝ紙絵さぬとある紙にかく
本歌はおもしろき木のさかを吹おらして秋の形をと絵てぞめぐり
にぎさいはゞ月は木の葉の数たる絵なりくまりさかりもなく
漉(すき)なりて秋の形をおりてなる也　例
枯より木のそくりそで月や出らん 寛秋門院中務 新古秋
みるや立田山ちるあらしの枝なり嵐吹なり 家隆 新古秋
かへしてまる也此首引合すべし　是は本歌にはさ
木のさまるかぎて絵つて木ずくされ葉の落ぬ不月ぞ移らん
木のそれちるま次第に木の葉の垂(しずく)添て月も影がうかく

落葉のしたにうつろふ月影の色さへいとけぢかくなりぬ

木なかのこれ落るゆくへもしらぬ落葉詩よ。追夜光多呈月。毎朝聲少漢林風 順朝詠

注京洛舟月沢三首 冬月

夏ゆけばいとふあしれ雲さへて雲ふかき月れうけるか

夏てい嵐も一きたさえて。月もこゆる冬の夜の体也

清水たた大納言家十首 冬月

さゆる夜れ月の宮うなつき川ちりもとそてどこうぎよ

冬夜なら友無れ川の川澄よ鳴ぞ鳴なつ山陰みて 湯原王 万二

やどうる月。夏月よ中う。冬月の冬月の冬夜月の冬夜月の冬夜月

無川よ月のうつる西に光のこうる冬月のうつるゆ月のこうるもいとしどさあるゆへこうるもも

てびゝいうどこも一面こうるようてそてどこうるた

月を氷うこうた光の冬夜ゆくこうる方うこうる。秋月と氷うこうた月と氷うこうた月

網代

月さゆるなうみ行れこうる夜もたくあどろもうん

田上川。近江石山寺也。川あのこうる夜もぎだたく

上波のあうを編こういて。冬月の方へもうけて。この白一面夜

かくみり向いこうる夜月波のりて亀ぷくたえこうて

いつ石也あどうを冬ぷくたえこうしゆく也

金蓮寺前合

うぐいうれ秋よの夜やなどうる月新さひしうぐれ川ち

さひうよ夜あうき今夜月夜りや我とまうんうの樹 右京一

月新も冬ぐうれ川波も冬さ夜ぷあどうるうて樹

月はさ冬月新よ人を伝夜て夜うさ。秋もゆうな夜い

あはれなる人をこそ友とすなれと也。網代守も給ひとして
あるゆへ也

小向川なる河にくる後をよし十首より

河上冬月

あらしに河霧をはらひしぬあし鴨のうはげにこほる冬の月かげ

あしのもの霧をはらへども上毛に月の氷るをおもしろきを
けしきを思ふ也

氷

かはおとのとゞきてゆる冬さむしむすぶ氷の中川の水

汀はこほりて中通りはこほらねば水音の遠くゆる也。氷の
中に中川へひとつけゝる也。中川は京極川也。前に出たり

弾正尹親王家五十首に

ふ隠れ岩のかゝる清く流るゝ水のそこをさへしもぞ冬をつけぬる

氷のかゝれありてこそ岩つたひいふ諺のありけれ。音なくして岩のまへに
不一趣向也。氷りて水の音であれぞ。冬のさむさのまされる故。
岩うつ浪もうつりしものゝし助字也。音をたてずなる也。氷あそばゞ氷
岩く也。下に出たり

民部卿家五首に

河氷

さゞれ川かくれてながれそのまゝにこほりてそあるならばさゞれ水がくと
井手の井はゐ井せきの中うにおとせくる也。かぞくすばのきえうつる
かしはのまくにてこほりて水がみあはかりうつる也

みなの瀬をさやかにみゆるとそすばの音ぞさやけき　湖瀬淵流るく

読人不知
拾遺雑五

滝氷

おりやく瀧なかれすらに冬さむしこほりて流れ音もきこえど

田村の御時に女房の侍ひにて御屏風の絵ゆゑらんだりけるに、瀧
おちたる所おもしろし。此を題にて詠めと仰せられければ人に

きこゆれはよめり。三条町〽思ひせく心の内の滝なれや落つ
とは見れど音のきこえぬ 古雑上 本哥ハ心のうちは滝なれバ落
ても音のせぬよしなり。此哥ハ心の内の滝にてもあれバ。氷るゆへ
に滝も音のせぬとよめり。おもしろくはたらかしたり。
おとなし。横通也。又みなかみなど氷る也。心の中に滝よりもふかく
ふかき也。深くそもなけれと云まいし。〽みちのくのしのぶもぢずり誰
ゆへにみだれ初にし我ならなくに 古恋四 〽かくしばし世をやへさん
高砂の尾上にたてる松すらもむかしの友ならなくに 古雑 〽みやまの(?)しかし(?)
めづらしきやうにもみだれんと云。我ならなくに
かやうに心の内の松風にこほるまでたえぬ滝のこゝろか
高砂の尾上の松の宿ねとしめて落る滝の白玉も数も 古秋
松風の音これゆへ氷りぬれども。又松風が滝の音れ(?)ゆくに
ゆるたり

氷

はや瀬川よどむ岩まもなかりせばかくやは結ばんあたれちる流
瀬の早き所ハこほりかねるものなれども。岩まにハ水のよどみ
のありてかくよどむ所のゆかりあるをたよりにこほる也

金葉ちかく　池氷

〽萩もかれ風さえて浅るまでにれ果つるやまがけの池のみぎハ
〽しのぶれのやまのさやみぎれども我ハ独すむ雲のまに
新古 人丸万一 さやのお神秋に出てさがれは尋ねてさやまこけ
その池の水は本哥にあるゆへ出より。氷の下は岩の宿ぞある
までも。あらかじめそでかなしど。さればこそ招く云縁也。池のある
なく月は格の御也。氷のした宿の本哥ちかけてはらはよす
ふき風の吹。匡房 新古彩 羽玉 いかでかの月ハ見えをさぐせんさげる。氷は
氷かよふり 狭山池。摂津国也

源たゝ卜家五首　江氷

くやき淑い拾をしたてゝ立る川の入江れ家まげこかるん
淑いのみくやきゆく氷ぐてぐ家の布ぐ入江い氷のぐぐゆ
へぐ氷りて青れなきぐ立る川ぐ大和ゝ布留川ゝ
いゝあるぐ秋しても咲ゆゝ

朝氷

これ氷あるよごのゝ波ゝりめてけゝ見ぐふゝ毎ゝ
こめれゝりい氷れゝぐ夜ぐれゝ見ゝりゝ春
ゝり氷ゝりてゝゝれゝぐれゝ氷ゝの風いゝゝて
氷ゝ安貴王　秋　汀ゝゝゝ入沐を行ゝゝぐゝゝ

湖氷

日ゝ社ゝ首ゝ合ゝ
氷毎れゝぐれゝぎゝ氷ゝゝゝれゝゝゝゝゝ
まの邪道行ぐ湖ゝゝゝゝゝゝゝぐゝ毎ゝ

氷ゝ氷ゝゝゝゝの氷ゝ氷のゝゝゝゝゝて結ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

清ゝたゝ大和ゝ家ゝ首ゝ　ゝ草

尺ゝまゝゝゝれゝゝ氷ゝけゝゝん氷ゝたゝ芦ゝ
ゝ氷ゝゝぐれゝゝ氷ゝゝゝゝゝ推量ゝ方ぐゝゝゝ
ゝ根ゝ芦ゝ根ゝ根ゝ氷ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
芦ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ氷ゝゝ
氷ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

梶井二品親王家ゝ首　池水鳥

冬ゝれゝ池ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
芦ゝれゝ拾ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
小倉宰相中将ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そこのみさゝ洲やかさゝぐ山の湾さ流こそあぶ沿いあて
氷つて沿いあぶとよあつぷ。幸奇よ洲やさゝぐ山沿う之
さハぐあゝ云ふなるふぜ奇い水鳥のあつまりて都てさゝぐ也
よろう。幸奇に沿つてよあつ

重後院入道親王の御くれとやうこそ
こし鳴れうつげの素をつゝぬまれとやうこそ
あつの床いあをこの玉藻乃中ふかうゆいつり雑法ぐこ沿を
発ぐるすもれあもの床ようきれしも 新撰 水くゝの玉もの
床のうれ枕ふれとい 匡房集 川百首 上毛野 名をも
ら人間ぐや水鳥乃床も氷りやしんと。宗家のつゝ侍と
よろう。つかゝくも

池水鳥

池水れふのうこのゝ絶ふよろ沿はやこゝりれ去こぐゝん。
鳴ぐ水乃下とくゝて通路とすゝ。水の面乃氷くて。通路の
絶あまたぐぐ氷の下とくゝるんゝも也。泳 潜 ちゝや
ゝる神代もきゝす立田川かくれなゝ氷くぐふい 伊勢 ちく
ぐふ水ゝ秋こそかゝ上比法ゝ泉のよさゝ深ゝ 中務卿
清ゝた大納言家旬十首 鴨
鴨 和字抄 和名曰。郭璞方言注云。鶬鶊 辟倪二音 和名抄 野
鬼小而好没水中。私云俗ゝかいつゝくゝ也。かい
ぢゝかいくゝ也水中とくゝるゆへ。かいい搔也 康字也
小わゝれ法のうれというくまあとゝろうゝいくゝふ也ゝん
法のうきすい水ゝきくゝいて。上くゝろうくゝ上てゝゝくゝいろの
まさうゝも。底ゝたうくれわゝ。鳴い法のゝと通いて。何ゆくゝう
也くゝくゝよろう。也ゝくゝよろう。鳴の法巣乃

又藻塩草には、きぬをきてすれ紙ふすま也。是に付て相論あり。今は
新敷水鳥通ひなく了簡して「寝覚の床のつれなきもゆふまぐれにて
すそごともれやみがくれもきれば此哥判にて勝なり。新古今俊成卿
是をいふなく大に非ず。曰寝覚のうきねの様をよみてこその景
はなのくもり中にてあらわぐれにくらくさきそでいよいよあり
ても捨られば也うぐひそにはなゆゝしくあるくぐりにごく寒さと
ならし此哥新古今集よみ有ぐきとすの事へ袖中抄に委し。東
長き数累と

寒水鳥

をし鳥のねはかさね〇てもなれ衣やさむしきそふけてつまとふをしれ毛衣
寒夜は衣をかさねくきるよしあり。をしの毛衣にかさねとか
さ拝されども君ゆくわがれくさびれば佛て寒夜すれはよそさ
よみ侍へり〇く妻をよぶ也

冬の池にはうかびぬるをしはそのまゝさへ氷れとしふにかくまゝとはしも
氷の床は床のこほりとなる云　「つれてきたるもさなかずれはうへ
くれて氷の床よりもなれたる　寄水鳥の寝るよるまさへ
為家卿集 風冬
らふ羽風しや氷の床はのさゆれん　教長新 好冬　をしは常に雌雄で
ならなるをに物ねとるはそのまゝさへ衾かれとするうゆらん
とも也。床は雌雄あるにゆへいつも衾かれは離の字也。はらふず。向
のうちなる事也。意の下は経久忘れたに妻し「寝覚の暁わびさ
を思ふぞみずは君が衾との衾がれせぬしや　続後撰 冬五　此歌も有紀

続たる長家二首よ

をし鳥の床もはらひあへ寝られて枕ながるゝ冬はいけ水
海川枕ながれてうきねすは夏もはぶらにえじとぞ有ける　続後撰 古今一
池の上は枕ながるゝゆへにうきねの床も定めかね也。さ
ねも水のうきにされてねる侭也「冬の池の水にながるゝ芦鴨

乃宇ねたづたいく春るあるん 後人歌 拾玉

二條大納言家一日百首よ　池水鳥

をし鴨はうれひの床れ枕ろう行ろう古わろ冬れいけこう
枕ろ行ろう点のさわろうれば せんうこそ床たろに枕る 古能 僧
ゆるのすぐく音ここさこうあたしうきれの床や水ぐろうん
拾玉 池のよ住をれ枕乃方くかうも。彼の方うも水りて寒れた也

金まち奇合　水鳥

をしゐれちゐいづふそゐ枕てわろけのそをむまてり絵
うれい雌雄入い友くこ一所ゐわろをえ。かくみゐやよ毛の葉と
ろくろんそれのをれ枕あよ嶋 係恋著 千首 うやの池乃芦の枯
葉の芦づこやくれのをれすろうなろん 後素 いたくはくれ
してう。彼月のそるもれ方く行也。わろけい。彼月。入い物言
也。彼の事まして也

おかくろろを
夜をさむと鴨のうりげをこくれぐづけて水ろ冬乃池乃
言葉ゆくよかしの上もをこゆる彼のぐづろる叶ことれだ。その
まく水ろ也

冬川の風ふわろ鴨い枕ぐろうぐろい色をたゆる水れもろ彼
言葉ゆくれろゆくぐ浩のこゆるみも枕ぐろうぐづてわる也

小倉大納言なくくく

しけ　浩ろう

川の風ようれ水鳥乃言をくてとゆきん彼を見そぐろう
いうぐろくすぐろけるぐと思ていもくころもの葉をぐと
ふ 拾遺 伊氏王宮宇浩の八宮乃彼をくふ也。音をそくてくへ。
今ろくくしも。水をくたく言ろをくて者をくふ也。このろ。二本
手をくての彼いパ宮乃まをくくろぐく住彼しく彼をくろ也。

本所こうれ水をとりてこうれ舟をそなへてこうれ舟をこうれ八宮を作りてこうれ

清さを大納言家ナそ　水鳥

雖波行やうも称れをこの作ぐふまぐ源氏萩ふ桂やうん

桂のみちくるゆくさぐぐせ　ゆれ家ゑ出

ひうれかい作ふ　廣沢れ池をうれをせ侍

ふぐ

廣澤葛野郡在鳴滝の西十町許山際遍照寺之地也

きをれせぐきいてふをみるまてさぐひ作沢れ池のをう

あるうれいををせを入てなうゆうる也　ゆまを水のあいかく華木

澤氏法ゆを出うゆきへの新ぐふうあゆうれそこハ須弥

なぐてぐに　世表　せぐ作ぐるいをのの石をせぐ作く

ふういう極法のあうぐもうれふえ　莊子。秋水篇ゑ河伯う。

秋ふの流も来くぷのの大きたく廣ふ紙ふてぐさうはなーゆを思

ひふ北海ゑ至りてのぎうもたくひうをうをうくれぐうきた

ふをとうをうをうあうかうへ

清ふた大納言家ふく。　千鳥

霜さえてふ鳥ちくふうみうゆきうれうれのうをのを

ぐぐ玉の表ふ明りハ樹ぐうれ清ふ河ふ表ふをうれのうを

ふ作也。が桂ゑ来ふをふ河ハ刻して一ふをうの表ふをれて

洗ぐをぐして作ぐ。学者の工夫れ入ふ也

海士ふ鳥

れふうふうを風ふしをうをうれ乃奥津小ふをうれのうん

廬原ハ郡の名ふれも。刻ふを名ふふも有て。戸原。三保。沖津。

三ふ。同ー茅ぐ浦也。沖津ふ名ふるれも。此ふうをハ。唯沖の

来ふをゆく。津ハ助字ふ。滝津ふうを彩也。戸湾ふうを

あり。戸ゐ〻同所也。清見ゝの西よりあり。まつちゝ久〻ゝえゝれて
戸ゐの玉田川ゐ〻独かゝ有ん（弁基法師新勅撰）　ひまつちゝ川ゝ四川と
いゝ所ゝ。戸ゐふゐりぬまつちゝ川ゝ四川同所也。ぴゝ方と武蔵の
玉田川のゝ方とゝいて。金竜ゝをまつちゝ。ゝい浦也。玉田川
ゝゝて分て。俗まりゝ。俗風の杉ゝ昨ゝ。ゝ保の
神ゝゝ。ゝれ俗作ゝいゐ。

金まちゝ方今〻

風ふけばたゝれ波のあぐ法を翅ようをて千ゝやうゐくゐり
芳ゝゝ。ゝゝゝ所れ波乃あぐ法いかゝぐや神のあれてゝすれ
（一宮紀伊　今ゝ所ト）あゝ法いゐぐ波まで也。年方いあぐゝゐけてゝまる。
風ふけば法のゝまゝゝけゝ風ふけいゐゝゝ法を翅ゝ
うまゝてゝゝ也

ほゝゝた大納言家ゐゝ　英千鳥

ふけゝゝゝむゝゝ春夜れ月新も乃でれ波ふゐゐ乃ゐゝ
指ゐ波甲列也波ゝゝて分て。波也の指ゝゝゐるゐゝゐ。
俗也甲列いぬのゐれ関也。俗乃ゝゝゝ月ゐゝ有ゝゐゐゐ
のゝ文字。類乃か也。乃の字。ゐゝゝ。ゐゝゝ方い敬ゝゐ也。ゐゐ乃ゝ。
類ゐゝ所也。ゐゐゝゝ大方類也。杖の下の杖ゐ野ゝゝゐ所ゐ。詞
書ゝ委ゝ。歌のゐゐゐゐゐん。ゐゐゐゐゐゐゐ。月も乃ゝいづる
乃出の波ゝゐるのゐ也ゝゐゐ。ゐゐ波ゐゐ乃ゐゐ出の波ゝ位ゐ
ゐ者ゐ中代ゐゐ。ゐゐゐゐゐゐ俗（後人家ゐ古歌）

大臣大将頼朝家ゝ首ゝ

ゝゝれゝゐゐゐゐ守れゝゝゐゐゐゐゐゐん
波路指ゐゐゐれ乃ゐゐれ乃ゐゐゐれ乃ゐゐれ
（平重衡ゝ作全ゐ）ゐれ我通路ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐん
（作物）ゐゐゐれゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

関守はあれど浮世を離れぬる身の世をうらやみ
いとゝ新めの涙はあらじとぞ思ひ侘び
くれぬるかとぞ思ふ　谷寓言出

深みゆく

ゆくすゑ深みゆく清見がせみをまつ
清見の向ひなる三保の松原
ちぬ風の面白し　かゝる
なる浜の面さへ　拾遺　仏詞也

孤千鳥

いつもかくなく波こゆる孤の
石見い山海そ信のうらとあるれいふ
をあらくしきりに石見深み孤も千鳥もしきり孤のうへ
は奇もそいよ也　孤のよるたちもいふ滝つ瀬も伝ふ

思ひ神をん一万十　若紫の寒み孤のうへにいつる月
延文三年重儀院入道親王家歌
和のれうふこ変れあるも今はいとゝ
桂河奇。撰集に入事。拾芥抄云。後千載集。文保二年二月
四月十九日。依後宇多院院宣。為撰大納言為世卿撰之。
続後拾遺集。元亨三年七月二日。奉綸旨民部卿為藤
卿撰之而不終篇正中元年七月十七日薨去之間。為
権中納言為定卿。相続。正中二年十二月八日奏覧之重
奏奉勅之後風雅集。萩原法皇自撰之貞和二年丙
戌十一月九日被行竟宴。撰歌。此三代の撰集。延文
三年より為定卿の撰集。此集はじめられ侍る也。又新
千載集。新拾遺集に入ても。延文よりいはの事也。
度のあく鳥の沼の事也。撰集に入れられけり。撰集に入れられ

らけし事をよめり。鳥の跡ハ文字の事也。呂氏春秋曰。蒼頡作書云々 蒼頡生而知書。写倣鳥跡以造文字。淮南子。帝王世紀同之。事物紀原ニ委し 古木のかげにたぐひてかりそめの跡久しくとゞまれば 古序「おもひしるべのあとのなりみく 拾木「つもれば此世にぞ続千載わすれもまたあかぬ紙さびしる 続人不知古新下 わかの浦に寄れ事をうけてそのかひはぬべし。三度撰集に入て後ハ。新千載新拾遺の二集へまづこえてかれぶら同じ事也。此集続の雑に 玉にし波入にうたれいづみいづて舟五度あらハ彼やうくろんの御門合てうへし。友千鳥とよめるはは三度の集に。於何ともひとく入し友も沖津にたくかく成るる也

二品親王家五十首

まよれうした涙をともかくどへ續千載ふかくにきてかくれ紙のこさま

愚癡無学の身なれハ。和歌のみちでハ。何によりて世に名を残すべきにもあらぬ也。和哥ハ執心浅からぬ事ぞ感じ入べし。それども名聞のためによむるに非。おのれ短才無能なれバ事をはなれてたゞ哥に付て名を残すまでも也と。ゆるしへをまるはていつまでも也

建武二年内裏千首に 冬動物

いふおよびかれしくの友千鳥なくあれのも拾うてなうちまと聖代の勅の所まで達て。友人まづく共にも。撰集に入。千首ましるくにくられし人ハ。此世に何の思ひ事あれまつまうそも。よろこびの涙ながらて也

續千載集巻頭九月大江廣房許なく寄る人続し

小 千鳥

續千載集撰集の事前に注す

わかれぢやねがひ入江に跡まそかひあるなきまれ友千鳥かな
廣房も新河も、読歌集に入し事を悦びてよめり。かひ
あるは貝によせて、世にながらへて住身のかひの本意也。かひ
がへしつる也。ひとへに通音也。事をなして其かひ有
事也。詮の字也。世間のあるやうに云ほど也。前を云ひ又続
のこる数ならぬ身を世のまゝにあるあまもなのがらく
かひなしとこそおもへしられ 長谷雄 信のいをさいけるかひ有る
ぎりとは年ふるあまも今日やしるらん 若菜下

まだ蓮に入道二品親王家にて 海邊千鳥
夕ぐれは松をさして浦千鳥友よびかはしあはれにぞたて
ゆきえたるなき面白し

法眼兼誉がもとにて人々よみ侍し時 千鳥
さがれらのとももとは神に人さ夜千鳥此しの跡はちとらぬ浦ぞ

昔同じ所に居住せし人の今は別々に住るよしにて、昔の跡
をたれど友とよびて千鳥の鳴くにつかはしあり。志賀の浦は
故京なればよせて、昔の跡とよみて、昔の都の跡を友と
なくなく千鳥によせていへり

太神宮にさらに奉りてよみ侍しとき
斎院に侍る時神ならして うすれぬや葵を草
に引むすびかりねの野べの露の明ぐれ 式子内親王 新古今 別
云かく歌の家の時かり庵を作りて葵をかざるよし。
祭する也。挿るに見るはかゝる歌までの事也。神だ
らと云もの同し事也。此集の歌は伊勢内宮までの
事也。伊勢社人其云内宮は五十鈴川を渡りて二町
ばかり。一の鳥居とつて神あり。其内に神楽所
神事に勤番する所あり。神主こもる所也。此所を

神ながらこそ所をも鎮まりこそ此所なりけれ

をぢろ〜岩れあるも日にそへて冬ごろゆくこのわくれ

日ごとにくてい鎖ここすの日れぬるくゆくるくて也四条神路

ふりの信小篠なども有ぬ岩ぬ所ふたきあるのんごらんに日

枝つくるりてあんいふもとみめくし

金蓮寺にて奇合　　篠霰

をくさやぐをぢがうへの夕霰をとれかゆるうきるか

君こずは物やれうんぢのくれみのもそんに岩吹雨を法師の古歌

あるもの音れをぢんさやぎて霰をもけしく行けるく降也

さやく早枕に出るう

竹霰

霰ふるる朝きれ窓の竹のまるよ霰くごろるをこのちやけを

ぢくでも竹のくにふる霰ハ降やけるこん霰ハ降ふるん

じ一人さやけくこそれ也　霰みぢれて霰ふるう　古歌

霰例

ふる枝ども動でくごくふる冬さしき霰みぢ枝て降れ滝はを

滝もこうりてはぢるもるくれど霰のうて水ふるくぢ

くうぢおくくゆ也。布留滝大和也

前茂大納言家ふく　　古屋霰

ぢくれるる出ぢの寒い霜ぐまてをもかくまだつるうきを

出ぢいりくすふるれい出ぢまの霰れるゆくかくれちか

たく出ぢ云名ふちぢんて霰の音を出ぢだかくれる也

民部卿家百首　秋歌

年をくてあと行宿れ板ぢくくてと世ふる霰ゆるあり

宿のあれてうきに長ちるふ板屋い霰の音れぢ

くて。宿きたにひくのぢくにくもあれぢわくくゆ也ふくも

所をうしとおもひてはきえぬ物とのれいかくてもるゆきをうしとおもひてはきえぬ物とのれいかくてもるゆきを

き（後撰雪名歌五）　此歌のいきおひ也　人をまつ子松の園やの枝ばさし

あれあらはいかでか秋の風（拾遺恋五　彩色雜中）　枝ばさしはちとやもとやはそぐ

袖ぬらしてをもをもをれ方いまるあ（新勅千湖）　あづまやれ初のうぐいす

枝ばさしてくも見ふたれよりるふ（拾遺二）

冬歌の中

雪は花はちるとあるぐ風いてぐふのとさえくもしつ

ぬそやちの袖吹ぐ花を風散ををみてぐに吹（四条工宮後百首）　雪

を結ぐ玉ぐ風の雪紙さえくるまぐ。はるかとぐ見ぐ

たちなぐ風のさえてそれぐるぐ。ぐるぐるぐ

乃はのぐめをぐぐぐとぐぐぐぐぐぐぐぐ

神を月をぐまぐ日ぐはぐはやひぐれぐ稲ふはぐはぐぐ雪

神を月をぐぐぐぐぐのぐぐぐみぐぐ降ぐぐめぐる（後拾遺恋四）

例かいぐねいとや雪白し神を月ぐ雪てぐるぐさやれ中ぐ（道すがら嘆抄）

是ぐ行樹の雪とぐる也。常の雪ぐ。十月より雪乃ぐるまぐは

ぐけまぐぐ。比良い高ぐぐぐ。ぐをぐれいぐ雪の雪ぐる也。

神を月。奥保抄。神を月ぐぐぐぐぐぐぐぐぐ。俗間乃後人ぐぐぐ

不及記。ぐぐぐ。湖水の事也。日本紀天智天皇紀云云帝幸ぐぐぐ

い。湖水の事也。日本紀天智天皇紀云云帝幸ぐぐぐ

乃名をぐぐぐぐぐぐぐぐぐ

うぞうつい雄也。ろいやとゝ字也。くゝれいゞ長き尾也。げゞめて
神てれゞくゝれとゝてゝうゝ。ゞ人丸。とゝの尾れ方。紙注ゝ神ろ
のゝくゝろ尾ゝいても長き尾也。長谷とゝてゝ用ゝゞくゝ尾ゝ彩ゝ
いても長き尾ゝ有也。梅ゝるゝにゞくゝいをゝう也。ろゝとゝ横
通也。をゝうのゞゝを略ゝゝうゝ也。ゞうのゝ紙略ゝていてるゝ神ゝ
ゝゞうゝゝゞゝゞけゞゞゝゞけゞゞゝゞゞゝゞゞゝ

冬枯れ木まいまぐろかつまこてれうはるる孫はさつゆさ
とれいまぐ反葉の枯ごてこのれい雪乃つるゆくかくうて精が
うくれてえてど。冬枯乃精い。葉をさゆく雪もはるる孫ぐ
うづもれどてて木の枝がかくれどあつれてようえて葉
乃あるれうに比て先はるるて糸のとれた。み役での字。濁るか
くれい。葉のある。ときいぶ乃反雪乃ふるはるるて白きゆく。
うまくようくあつれてえゆる物ふれも。冬枯ゆく葉乃ふく
雨。はるる孫い。歌つれてえてだれの本ふはるる也。ぶ役
不開ぐ。びいまぐい未乃字の白ふ非　物ふえまきめる常
まうけてちけくもいまぐ雪反降て（後人古本古春）　けさ本時い
まぐ孫ちる杜字。形徳（後人古本古文）　白ぬ乃和
雪ふつめ。冬の枯いまぐ所白のそくえるもん（壬生二下）　此顔のい
まぐうてまぐ前れふくちのいまぐ也。いまぐと。

まぐも同じ白ふて。ふくのふりあり。時考ふて。ぶ。擬（まぐ）あり。紀
ぐし

贈た大花家五首

曉雪

冬れ夜も明るぞ反ふたムのれみゆふや雪れひろ。ぬん
長くて明ゆ。ある冬の夜ふれども。冬の雪れ光ふ明乃
まし。明やふたしつふ。性雪ふ乃体也

夕雪

ゆふたた白紙ふ家ふく

ふいふれ。ひぐいかくえんくふぞふんじみひれふ雪
前日より雪のある冬ふ。冬白いふ孫日。雪の埋ふくふ
ふ乃雪ふ乃。ふ。雪乃いふくふて。ム路もいふく孫めぐ
ふ也。夕より前中ふふいゆふる也。ぶ粧い孫乃也

日土石社三首　元合

清雪ぞあふふいふる模れいをふぐあいぐふぬムのあしよ

[illegible]の西まもるくしふれば桂のくもゐ[illegible]て色付[illegible]

人丸方　新古今　本方は桂の葉ぐ所[illegible]と有と。

仏前は雪う桂乃ち紙堤しべきことれは嵐が吹ちらして。

堤ちえぬは雪ぐあくれたるひうれてちゆうたえ堤ま

ぬ也。面白取相也

大臣大将家歌合　山雪

こ[illegible]れたるかりの雪れきたるよりそ花のうざしちやうん

いあ[illegible]へ[illegible]きん人[illegible]ぐやこ梅のひげたかこ[illegible]わ[illegible]ん　金葉雑上

かざ[illegible]桂乃雪堤[illegible]と。雪の[illegible]ぐ桂乃枝とれてかざして[illegible]と

ちゆうたんち也。雪を[illegible]ちてよ[illegible]る也

猶た大臣家。雪の又首

いまて桂ちんるまちちうち風乃雪ちさつこふまんり乃下風

仏結白風を清て道と一本れ有。乃ちてもちゆまちち

法の字花。かぎとう紙。きの字。きの字よ仏ちれは濁りて

きと書字ちう花。乃はちくてちと字ゆう花法なりんこと花。風

はちんは有。花の下法は。ちて堤ちを物ちれも。雪れちれて。

ち紙く堤ちちは。ち風ぐ花乃雪紙堤ちて。本法ちり

落ちちれぐ也

紀ち房新長六代千絶れ法を花ちてみ将こちう仏

しちう雪れ新よりを〜仏

行房新類云。藤行房。四位た中将。従二位経尹

男。玉葉。続千載。続後拾遺。新続古今作者

白雪は法をたつ称てこ変ち物ふきたちうこかちちぞかちてき

ハ雪云大花　うけちいく。みちさん。近来大将。みちさん。中ち将同ち

ちちれは大花ちも。大将。中将。ぶれをしみちさん　ちちうれし。

拾遺雑。賀よ。花ちく花ちあ。ちうあよ。ち紙ん致平の

みこゝろてゞがねの君わたくしといふせうる紙ぶくろをみて。
かの人このすゑふつゝけける　あやしくも我ぬまごゝろをきさ
ゝるみこゝをいれしを人うかゝれて　一首の心は雪中に
さまぐゝの人の足迹をゝるゝ迷いぬべしとて古き事ども道う
ゝ帰るゝいて裏の山に中絶のあゝをゝれてゝふる
さ例あるゝ　ゝ　ゝ　

野雪

茅檐院賜花大臣家五首

かくてしも色はなき程ハ冴ゆれど色ぞ冬ハ色ぞ冬ハ色ぞ

かくてしも色はなき程ハ冴ゆれど色ぞ冬ハ色ぞ冬ハ色ぞ

草と雖枯れぬ好をうけそしめり　春霞きのふくさうつし

はるかぜかぶくこの花の新しと　古春　紙の春色つくおこた

をけばこそこの木ぬきのちくさうつし　春霞　枯きぬの色くれ

花いかくのごとく枯く枯ぬ命ふく雪ぞ花のごとくかるかれ

明ぬのく高地時命のそやくく枯ぬ公ぬ

右大臣家歌

雪初雪

人ぬ組ハまの枯をもつまで庭ぬ雪はごとくしつ人とまつ

はれ神雪ぬ人のまくくをぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ

まどくくもつまでくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ぬんもいくはどぬ友をもまつぬ

て降地でれく降雪地　今ふりはつぶそふくふん我庭くの

雪をなみふれる白雪　後人歌　古冬

庭雪

勝尼大臣家三首

枯つまそくとハいつぬ庭れ面ふけさぬる雪ハ白ぬ

友よくせをくハちぬくくくくくくくくくくくくくくくく

枯きまくぬ雪ハ友とまつくくくくくくくくくくくくくく

乃友を結ぬ　白雪の色ぬ色ぬ色ぬ色ぬ色ぬ色ぬ色ぬ

きえのくくぬ縁雪乃初花をなげさて雪を降初そ

友まつ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ

風雲のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

梢花咲くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

雪ぬくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

待伴詩云　待伴不禁驚恐浮　五車韻瑞

法雪

新うけし茅舎の月は秋ふかし　雪の朔日とみるまでに　吉野の里にたづねゆく　雪は逆則　此寺にてきこえうり　殘月ゆゑ新雪にたとへきこえうり

金蓮寺奇合　桂雪

しら朝ふれい屋てしてつどいしぶされ小屋のよれまて　雪ふ印雪
湖の面のうらやましく人をつべきにたまつてなくれ芦は八重
ぶさ　糸芭蕉　芦のハまぶさしてある事なるゆゑ　ハまぶさ
桂深くうりくらもよのまも芦の緣也　和哥ハ名所の緣
陽ようせてこいやしく人をうしぶ紐也　ひ寄はなるのふいすく。
ちいさい芦ぶさの屋也　こゆやのたわやすくを都也　ふりあたも

出ふり

河邊雪

みふ〜ふやいはとがいはとうぶ　とてはの風さひと吹まるちう雪
いはとかいはの石をを　河邊川いはとがとのとれいなる　紙いか
よりん方代まだた方ハ　初中秋　紙明を岩ふ　秋也。或人
石紙かいはいふハ　接　ふるた岩常　柄也。常緑を上下
ふうんて云て岩とを云　常也　閑れなさのたちいあるこ　言葉
川いはとがいはとわ〜ふ白波　岩京　彩和　ふかみわ〜　紙波にの
ちたうるうるうるまでい　紙まてぶふ人を　岩ぶや　後和　こうしも石也。
かいはうきいはうきいはときと　横通也。かきりかれ岩也。常緑石
堅　ふうきいはふ柄の木をあるて云ふもあり

民部卿家歌とさくて奇合〜仲〜

曙の雪

天の戸のひらきみてそあかつのぼるたかく山ちる雪
見渡のうはまつこえていまこそ花ぞ春をしるらん 万葉 八重
ふたとせの秋をもかさねうつる也雪もつくはまにふる白あう。
見渡 相模也 天の戸 天までも也 ぼる出

野外雪

冬枯れ野ふのふかくる山ちに白れ雪ぐ極ふにうる白雪
ちるあつぐりいなのうつりまくちんのうやをいかくるん
猿丸集 神楽の御物もてくるいるのうつりあいてくしい
雜注 柴地云布墨 柴の古き湖也 日本紀神代巻下に蒼海原
いたづらとうきていろいかれてうちに寒よりうちにたづの
ふる計ちる歌きせんとは 待賢門院堀川 ちとは古物語
あ白なくる也 続後拾遺 古今三 通 ちるのうつりあるの

袖中抄ニ春ノ

入道前太政大臣家ノ歌ノ中ニ初ノ春ノ

いづくにか山路ハ入ぬ白雪ノ山ノ端ノ面ハ物ゆ物ノ行

山ノ端ノ雪面ハ少ノ物ノ称ノ歌ノ人ノ行

物ノ行ノ雪ノ消ノ物ノ物ノ人ノ者ノ言ノ山路ハ

いづ計ノ行ノ人ノ也

重護院五十首ノ

嶺雪

うつもれぬ木ノ下陰ノ雪ノ行ノ人ノ行ノ人ノ行ノ雪

嶺ノ雪ノ横ノ吹ノ也 木陰ノ吹ノ人ノ行ノ也 嶺

ノ雪ノ人ノ行ノ人ノ行ノ也

源大納言侍所合ノ　冬夜

野ノ雪ノ人ノ行ノ人ノ行ノ雪ノ人ノ行ノ雪

うぐひすの玉ノ手ノ人ノ行ノ人ノ行ノ人ノ行ノ人ノ行ノ人ノ行

うり（後人ホカ古歌三）ゆきの積りうはくもれるもの雪のきえて残るのはかりうしんゆりの花

嶋雪

白妙に夕はきもてらすもしらぬまてゆふつけ鳥の反絹（ユフ）か木綿か白さ物うれい白さ鶏（ニワトリ）寒登樹（サムノキ）鴨寒入水（ヒ）傳錦燈（ヒ）

晓ふも降ぬ雪に埋まさらぬ　立田山ふもとの明神の社（ヤシロ）の樹（ヒ）もゆふ付　ちの切れて降ぬ雪は飛ぶ雪

ちらぬ雪

降ぬ雪の白絹云十首　関路電雪

関の戸に雪ふりつもりてとくもなれてあるかくあるこそ

雪のえに早く明るる中ふまてくるまつ尺くるるのはのをきけ

ぐ中ふもはぐ雪の明なるる雪の中なれる雪の中なれる雪ゆりく旅ふ雪

委し。但此中くい都てれ方にきこゆる雪

雪後院四十首小　枝雪

あけぬるる枝れ枝をみくるあくる尾上れ雪ふ雪てふ雪

晓ふ至りて雪をさそふしくもし晴て枝の雪れそろくと

尺ゆる起ぬ明るれか。嶺のうる起。枝のそろ消ふ。雪に雪の

紅ふくるは。雪の晴る体　。明かのく樹をの体起　まの枝の

雪れ消くくふ絶て岩ふ紅くる樹をの雪（定家卿古歌）

東とよ行行は雪紅民紅たつ知りて雪ふ

しま　山路雪

雪ふくさくといまを流るる山る雪ふきふくん人と知ふ中ふちを

山里は雪降つみて石もふしぬくふくん。へを雪くいふくん（魚登拾遺）そ

日れは雪の面白さ山里へはぬるさは雪ふも雪ふるべき雪起。

雪れかくふくいふ中人れ雪てもふりふるべきに。

ゆてさらいもうゝめ者こうこうをうれてこ入うけきゝゝ也こ路
しいくだこつ系の事也

美路雪

板坂やゆくもかつるも行みゝく雪路たゞゝみけるれいとうか
二三乃ゐ輝九の雪れ詞也行人いされちて行ゝ人乃孤
をちるゞ乃ゝ入帰ゝ人ゝ人のあゝをちるゞゝ
帰ゝゆゝ乃ゝ見れまよゝ也ゝゝ乃ゝ 引み
ゝる我ゝうゝれの孤ゝ ゝゝゝ雪ゝ路乃ちゝりゝゝは
（行後紀系 後ゝゝ）引合ゝ乃ゝ

民部卿藤定綱家ゝ

松雪

こゝゝこいゝくゝゝゝ

まことにこれこそ雪は降るなれど田子の浦は雪
かぬかと思ひやりて打あくるに雪もゆ
きもなくて雪の白うさ明かの面白き景色
消えぬ明かの雪はれ引くあれはあれど田子の浦は
消ぬ

勝加茂にて雪をみ給ひし　実雪

降雪にみな絶えぬ清見がせ関守の
関守居清見がせ　倒
雪は深し清見がせ関
なれども立ぬ　玉吟
ひろさえ冬の月新　清見が関いかにたつ
は海なれば実雪ぬ　清見が関の波も
たつ打あくるに雪やわ
しろき雪かきうみ

免ぬる　大井川と云ふ　文移化　今の公関より波はなま
りあくるをそ雪は降
まで降はりうち也清見
乃折うふるれい波まは
しも今はよの方れるとも
ついも抱あくるれば
中さ雪は降いつ
いまりあくるは
梶井宮三首

清見がせ雪はれ戸ひらくあくるに波はたみの松
はるの向こそ三保の松原あり海を隔て松の雪
ふる景色面白うしい清見がせ実の戸あけ
てはこそ三保乃松原へはるの関よりけるこそ明行体也

雪の縁乃詞とも為べし　信濃または波のごとく也。信濃の国の海
色に時雨ふる注

湖雪

ふりて海はたちまち絵にかけるげやうとなる白雪
信濃はあもなかれて物ふるとて雪も降るなり　来るなりとぞ
もとそ　ゆるは　ぞれ雪の信濃のほうとなる也　風信乃
ふるる方に釣舟も風にたよりもとめべし　名所勝景
つるこもやこりとうきて　つるるん汀ぞ　氷なかるさんのまつ
幸崎の松常に波うちぎはにうちて　汀もけてなる
し雪れ氷ろくなる　ゆく汀の　くまくまくまく

なを猶もほのぼのとまがへなんぐく雪ふる見ようのこと。俗家の方
にて新後古今にあり。新後の方より出てるなるべし

不断光寺ゆく　林雪と

冬枯れもの〻ものよりよりる雪はいかれとも花といまもみえはく
雲林院にて梅の花のちりけるなかにてよめる。ぞくはし
ぬるちる花の雪にまがひぐく雪にて消ぐてたもるか
古春下　春ぬいかれを雪とふること見えるんてよめ
る。雪林院は春の所なれ所わたるゆく人〻雪を
みてもいかれの梅はいき雪と見ゆる也。雲林院域別愛宕郡。
大徳寺巽雲林院と俗云云也。江次第ゆ雲林寺。雲林御
讀経被行諸寺の内に有。八雲。俗云云雲の林雲林院也

雪の降れ中く

雪にまがふ梅ふ花はいさきたりあらしいや枝に花こそ咲く

時鳥や春をうちきゝつとつげわたん枝に咲るる花咲ぬるか 後拾遺春下
なを雪にまがへて枝にうもれる花はさきたれども白ゐはいまぐ白ゐ
枝にうもれるゆくなるべしとも也。雪を花に見てる小白ゐ人〻して
よもうの鳥向不審花裡宿 事文類聚 せをりて雪の花はまも也
鶯の雪にまがふと

賜た大臣家五首之　庭雪

松いとも雪ぐ中くにたぎ屋んといどいはしに庭をれちる雪
仕雪にたい幼育人いとつべきたにぞ雪といはずはたくき事
かなるもくぶ方うぶ雪をいとはぐふぐ雪にはぐ屋ぐ。
うのくしてこる何いぞ雪にいる屋ゆくもとおもいて。
にくき事もなるべしとて。雪をそこにこそいつり。此
中く雪を寿ての公はゆくゆる也。雪田はぐ雪をだ
共ゆ雪ゆくれ雪をつきだうれ事也

かくたぐひとしいつる事をいふなり。されども帝王の位をいふなり。
と云へりといふ。俗にて雪ゆゑ也。されども雪の中にもいとゆゑ
なり。中にも白雪を。細に。白雪を。白人と。詠ずる
まれにきまれ。とくとしいひ。ゆゑ多。
こゝろにいたくさ事也。雪をいふなり。
このくにのそなたにまれなるかとしいひ。
といふ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
方まさるべきゆゑ中に。雪をも。
つゝみ也。これを。一段ふるゝ也。奇いふゆゑの。
雪はしめ。一首の意味ふくゝ。
やうしさ詞。奇怪なる。
けて議論をべきなれ。
けこはまこと。
雪のふるのふるばかりしい事也とはいへ。
雪はふるゝ。
とりん事のみてゆるゝ也。
例
雪のゆきとふるてゆるゝ
拾玉七
ふるゝ
ふるゝ人のまこと
師教赤
之百首
ふる人の
雪をの雪ふるゝ
雪に
東
雪
都
雪
雪
雪

雪深さ五里の山路をしのぐも。市縁をとんで。さびしさもたくさみ
仕ったる。山伏音信をたくいい。紅梅の
のをとろう。紙の手。ゐるれ行くとくく。文字をもの弘とい
つた。奇の事といふのでこそ也。粧い沙也

侍従長舞をもち侍し日吉社に首を

立出くこれたくゐるそのまこしたまことかつてであこいたくふさ
人のもとに雪ちんまゆきて。面白さに帰るを惜しる間に。雪
のつもりこれいと。いえゆしずてあるゆく。我と家の存を
は人踏のたえるを也。入れなうくこそ

二條大納言家ふく　源之雪

侍をまこで入ふこれこの雪これ世ふるみちをあさまで
ちへへくるふをれこそ。こうきせゆゆゆふ雪をて
そきまでつり抜しも也。どそも浮世ゆるまこきて

ふくいこるをれ。ぜんぜをこめこうる絹也

寿量院二品親王寸首　行路雪

帝王編年記云性圓法親王　仁和寺寿量院　後宇多院皇子　一本に此

頃奇しくふなし

り来やうこいあ袖ふけるこんとこられ雪たあこ人しふし
りさきの道いたこふこ雪のけるそ人もかこいあか
どふるゆん。今分入ふこけ方へ来る人こおいあこ也

侍従たた大納言家文首よ　この月照雪を

これて枕けるふこそみ有明月ゆけうるみ絵れた雪
雪のふる間はくうて。岩の雪も紅葉よくこぎしる。雪
時て。月れうこれい雪れえも白くこて。月のえをゆく。
布く時天こ雪のけるうゆこいこ也

賜た大臣家文首よ　夢特

夕日さしうつるれをのゝ霧ぐまよいづくをうげと雲の井のうら
草の霧ぐれていづくに法もなきたゞまきたゞまきて夕日れうつるそ
なくれいぶ雲の落てかゝる人さ法もなれた也小野ゝ名あるあ
ど。唯雲物すゝ也

金蓮寺奇合

雲たゝりとぐられ糸の明り衣うるふ毋ふたゝれをくまて
とだらいぶれ地こ立てゆる事也　みゝ助はかゝる雪ふ燈
もてゝ立ゝ人ゝど茅ぐゝれて　匡房卿歌合　なゝ紫のうれ紫
のまゝ雲ちゝて雲立の糸ふうかゝ人　土御門院新後拾遺　雲れ立て
ゆる野糸を終日特ゝて帰ふ所ない袂ゝ霧のゝるまで添
くゝ雲ゝゝ也

茅葺大納言家ふく　夕の雲特

まふいをとゝぐゝとみゝど雲ゝゝ雲ゝゝゝとれをのぐゝど

日のゝ仏ゝ雲ゝ雲ゝ立てゆる雨も見ゝふまゝ。あゝもみゝど
ゝゝゝゝ事を栗栖野ゝいゝゝゝゝ也。栗栖小野。山陵。ゝ
科ゝ者

勝を大臣家ゝ首　雲特

立ちゝゝの雲ぐゝゝれゝゝゝゝゝゝ衣ゝ野
みゝゝゝの雲ゝゝゝれゆゝゝれゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ住吉い雲の出ゝ雲也　みゝのゝれ出ゝの雲れゝゝや
ぐゝをかゝゝゝゝゝゝゝゝ　拾遺古今一　掛特衣ゝ紅のかれ
みゝゝゝゝ雲ぐゝ雲ゝゝゝれゝゝ也。雲ゝに出ゝ
ゝぐゝゝゝゝゝゝゝゝ

乃屋のうぐれとめうたもぐたちぎりもぞする　家記彩和之

武蔵守師直家ふくゝ　神楽を

師直部類云。五位。高階師直。高武蔵守。豊後守

師重男。風雅の作者　神楽。内侍所清祓神楽云也

ちう。公事根元云。委。詩歌ゝ云也。里

神楽ゝ云也

とゝかなりまさゝまれうぐゝゝ

ゆきゝてゝ霧ふるゝ比ゆふ

楽乃榊物の内ゝ菖の末乃方也。かづらとする也。

ば。調の家ゝて。神ゝ水元をぬれこと本末ゝ返ゝゝ

内ゝ長ゝ文書ゝ降ゝゝ也

ゆきた大和言葉中首　遠炭竈

とゝぐれ紙ぞちゝ立のぐるもいつかゝ榊ゝ

夕ゝはこの行ゝまゝて。ぼゝ不ゝ凝居るゆく。烟ゝ濃紙ゝ

ゝう烟ゝとゝくゝゝゝ也

れゝ家ゝ三首ゝ　炭竈

冬ゝゝゝ

とみうまの在所乃ぞこともちれば人くれば里の烟は外よ。烟のうちぞすみうまの在所をとうれしらぬ也。年のくれをきこえぬぞよ

雪の中の早梅

うづもるゝ垣のはなの雪たにもあるまさりける梅の花

春の隣ハまこの迎をなる也　冬ごもりまこの隣乃迎をれい中垣ちかぐ花ぞ春の数なる　古歌潘　花を待まこ隣ゝ成たり古歌

迎をみちゝ里　古歌潘　雪を慢まこる垣かより咲るハ春乃迎をさゝぬ也隣といふ垣かの梅ちかく雪に白ハ花の中ゝ白ハ花ゝ雪に白ハ花乃白をこの雪乃ちう白ハ花ゝ雪に梅花乃白をこの雪乃ちう合をなる

ちう。映ぞるなり也

ほうたた大納言家十首　早梅薫風

梅ぐゝふかせこそ花ゝ久ゝ学れしるべいまぐゝ花ゝ咲こゝ

梅ぐゝ花ゝの春をまちうけ人ぐゝ梅ぐゝ春の風ハ白ハ也。たゞ人ぐゝ梅ぐゝ春の風ハ白ハ也。たゞ人ぐゝ梅ぐゝ春の風ハ白ハ也。たゞ人ぐゝ梅ぐゝ春の風ハ白ハ也。たゞ人ぐゝ梅ぐゝ春の風ハ白ハ也。たゞ人ぐゝ梅ぐゝ春の風ハ白ハ也。

歳暮

みるうぐとくや年くれてまたぐ梅ぐゝやとき月日ハ久ゝ

ぬ年ハ行くしのりかまた続ハ久ゝ新さくよ学ぶくこ

と約月日うれ（四天形）　此詞よりうち古今をとゝ小雨

八道茶を故大臣家歌三首　歳暮雪

あさごとにとゝのうげふゝるゆきの雪のうへをつもりてけれ小

ひくゝ玉の五ゝるゝ髪ハ年ゝふれて後の新よりゝ白雪（黒髪古抄捨雅）

年毎にかくのごとくの新よりゆる雪と降ゝ紙をげさ（古今　毎網）

ゝゝ続の新よりはゝる吉かゝら孔雀ゝ山へ白雪

乃除くゝ時年ゝず一年のゝゝ年のゝゝ雪

の雪と新ゝくゝ山ゝゝ年ゝ

獨吟百首

打ゝ忘れ年ゝ月ゝ日ゝ日のゝゝ月ゝ日ゝゝゝとゝ年ゝ雪ゝ

身を捨てい何を打ゝみ歌ゝ事ハ世ゝ捨ゝ紙ゝゝ昔

世ゝ在ゝ世ゝ年ゝ光を惜ゝみゝ年ゝ月ゝ今ゝ身の雪ゝと

ちゝ世ゝ年竟光陰と惜ゝ世ゝ出世同ゝ公ゝゝゝと後ゝ

ゝゝた大納言家ゝ歌十首よ　歳暮

ゝゝゝい月ゝふ老ゝゝゝ年ゝ雪ゝ月ゝ

大方ハ月ゝ年ゝゝゝゝゝゝゝ月

をゝゝ年のゝゝゝゝゝゝ老ゝゝゝゝ年ゝ

ゝゝゝい年ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ年ゝ

天象の月ゝ世ゝゝゝい年月ゝゝゝゝ月

方をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ月ゝ

歳暮

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

冬ゝゝ日のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ年ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

明もわれ杉やいくたびもうぐいすを
を（古哀）時しもあき花の盛たにまれば
ちるはし（初出は春中）杉しもあれと云こと同し。ちと月をかくす注

法華浄衆月次所よ

ふるさいそぐ山いもふかふかいあがくていぐくるく年か
ふ源さ陽番の事うれいせ人のやうに考とまろ用意を。
まといそぐなしいもなく公のちづうるれば定法のうはくも
よく定ているく年れそうもちゆくちるる也。ぬがえどの
くにいまいそぐうしいもちくぷうくもちばーて。
めて除目あうに成くぷそはくや考うりく外くを。
杉うど考よくるくをいうり

業書

あづまやの煙れ杉ぶのてづに明くまてのくくるくくうか

あづまよ屋に四方に軒のあり屋也。長月よ浦と。まくの板戸に
いくくけ。明くく縁の向よりあり杉くのまくれ板戸
をくいきまやいでくん一万十 文の所もまた
り板戸れくうに明くくやく杉をかゆるれ（縁側）あくがく
ふいくを作くあまくの板戸の明くくを（拾貢外上）何
をおと事もたくぷくづに明考て。年のくれるくいく
くで。序所にあるる也

野ちう方にくあるくで世いくぐふくく年のくあを
身まづうあで世明くまぎくく事をけきべ月日れ杉くよ
くゆがえて。入くあを杉ひ也。世人い考ふいくく仏いくぐい
しきふ段ぐれて。ひう年のくれくもちくる也

法華たた細言家みくく杉ふ仏を
くくい人身みくくけくれくでまで考ゆくくやちゆくん

年のくれまでなほ〻暮りといふてぐも。ちゆうせん勢意
身をはたらかして考へ知べし

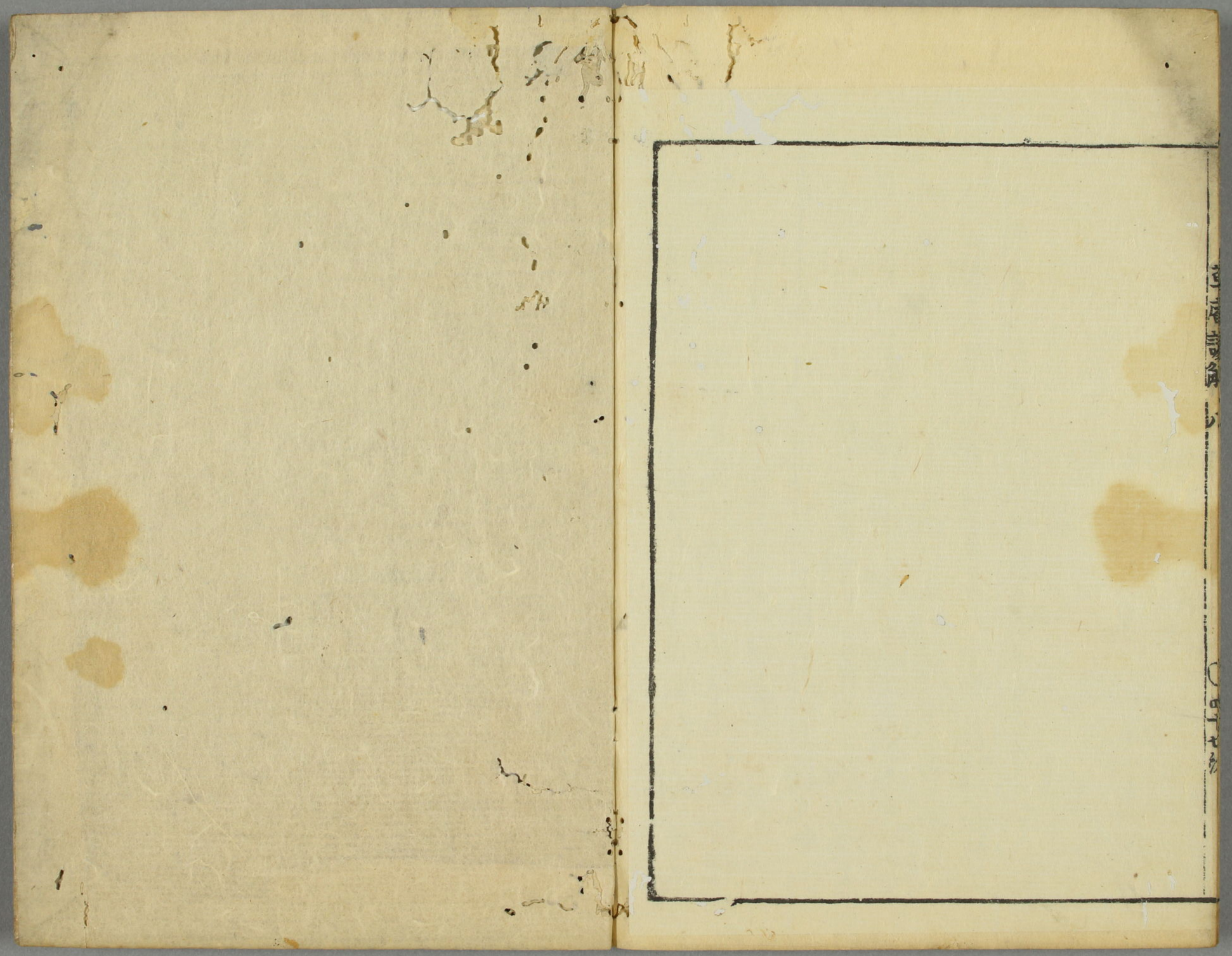
春去秋来三そう

あらたまつてはくるる月日はたゆまきて年れいのうをはたらかれぬる
日月は天の黄道赤道をめぐりて。一月〻。春夏秋冬と
はたらき四よはたらく。一年のつゆ〻。雪霜雨露云句よ感慨の名者。月日に
感じ。ふる也。つゆ〻くれゆくと云句よ感慨の名者。月日に
交のあるよりして。年れ交りくいつて。年の交はと云
よ同し。年光東流水白氏九　暮春滓水送別韓成封。
緑暗紅稀出鳳城暮雲宮闕古今情。行人莫聽
宮前水流盡年光是此聲唐詩遺響七唐詩絶句五　明らくいひ
今日くくくて流る川ぞ。れてくやき月日也。春乃別称古冬

憲長れこ行くみ行く百首

くれぬとは花ちる雪ふる年ぞくれぬるかぞ
ぞよりゆくいでぞ春冬とつゆぞ。夜秋乃系とこあるぞ。
き中。一年中れ風系紙こあそいつ。春秋といいて一年
をこりて云よ同し。冬もくれぬる年を行くれ。十二月晩旬乃晩年の
くれぬる年を行くれ。ふるの入相の鐘れあぐこに市人
も暮ぬと関ぞ。ぬるき後冷泉院拾哀　年寄ハ一日のくれを惜しん此
ハ一年のくるを行くれ。日もくれぬ人〻年もくれて成ふ
くる雪を雪ふ詠ぞ。ほく拾哀中　此寄りよりくるくる
引くくる人行くる雪ふ成よくるくるくるくるくるくるくるくるくる
大れ成れ十首の内也。拾玉第五。おく二三句よりくるくる

春護院五十首よ

ふくもん公いとくぶ人くるいそぐやみゆるくれくれ乃
年の暮るいくれも行くむくるいたれいぞ行くくくくくる

さらぬ[ヤウ]ぞ[ヤウ]ぞ[ヤウ]ぞ